近代日本のグローバリスト井上雅二――その人物像を中心に
A Portrait of Masaji Inoue: A Promoter of Japanese Globalization in Modern Japan

藤田 賀久

要約：井上雅二は明治期から昭和前期における日本人の海外進出を牽引する存在であった。彼の活動はマレー半島におけるゴム園開拓事業や日本人の南米移民促進、移民や海外事業に携わる日本人の実地教育の推進など非常に幅広い。しかし井上に関する研究は少なく、現在では彼の名を知る者も少ない。そこで本論文では、とりわけ井上の人物像を中心に描くことで、彼の行動の背景にあった原動力を描く。
キーワード: 井上雅二、荒尾精、南洋協会、海外進出、グローバル教育

Abstract: Masaji Inoue was a forerunner and promoter of Japanese oversea expansion in Modern Japan. His field of activities included reclamation of Malay, promotion of Japanese immigration to Brazil, and education for those Japanese who wished to leave for abroad full of ambition. This paper is aimed to to describe Inoue and his activies by mainly shedding light on his personarities and blueprint that he believed would contribute to the national existence in the era of the survival of the fittest.
Keywords: Masaji Inoue, Sei Arao, Nanyo Kyokai(Southern Pacific Association)

はじめに

「従来邦人の病弊とするところは、気局小にして徒に欧米人を恐れ、朝鮮人とか、南洋の土人とか、支那人とか云ふ者を、一概に蔑視する傾のある事であります」。[1] これは、本稿の主人公である井上雅二（1877－1947 年）の言葉である。

井上がこの言葉を発したのは大正 11（1922 年）である。それからおよそ 1 世紀が経とうとしている。この間、国際政治は激変した。帝国主義はもはや国家の行動原理ではなく、東西冷戦も既に終焉を迎えた。今やアメリカの一極支配すら揺るぎ、世界は「全員参加型秩序」へと移行しつつある。日本では、アジアダイナミズムの新潮流に適応するグローバル人材の育成が急務とされている。しかし、依然として井上の批判を過去のものと一笑に伏すことはできない。ここに現在日本の最大の弱点があると思われる。

現在、井上を知ろうとするならば、昭和 17（1942）年に永見七郎が執筆した伝記の復刻版に頼らざるをえない。永見は、井上の半生は「我国の近代海外発展史との一致」と論じた。当然ながら、いつの時代でも日本の海外雄飛を提唱する意見は存在した。しかし井上は「実践をもって、海外発展史を書いた人」であった。[2] ならば井上を顧みることは、現在の世界と日本の立ち位置を見据え、グローバル社会で活躍する人材を育てることが求められている現在日本に必要なのではないだろうか。

なぜ、これまで井上に関して多く語られてはこなかったのか。その一因は、おそらくは政治家や軍人、官僚といった後世の歴史家が注目する肩書きを有していなかったことにある。また、彼の活動範囲があまりにも多方面に及んでいるが故に、その膨大かつ複雑な軌跡から一気通貫した井上論を導き出すのは容易ではない。[3]

それでも最近では、井上を扱う研究がわずかではあるが登場しつつある。たとえば横井香織「井上雅二と南洋協会の南進要員育成事業」と、飯窪秀樹「井上雅二の社長就任までの海外興業会社――『山荘独語』からの考察」）である。[4] 南洋協会は、「南洋」と呼ばれた東南アジア地域に日本人の経済・文化進出を牽引すべく大正 4（1915）年に設立された。また海外興業会社（以下「海興」）は、大正 6（1917）年に 4 移民会社（東洋移民会社、南米植民会社、日本植民会社、並びに日東植民会社）が合併して誕生した会社であり、主にブラジルに向けた日本人移植民を推進した。いずれも大正・昭和前期に日本人の対外進出を促した組織であり、この 2 論文に触れるだけでも、井上の関心が東南アジアと南米に及んでいたことが窺えよう。特に海興と井上の関係を論じた窪塚論文は、アジアとの文脈でのみ把握されてきた井上研究に南米という新たな視座を提供した点で注目される。[5]

しかし、井上の活動範囲は南洋協会と海興に限定されない。中国や韓国にも足跡を残しており、さらには近代日本を悩ました人口問題に対しても非常に積極的な関与が見られる。かくも広範囲の分野に井上が関心を寄せた背景には、同時代の日本人を圧倒する海外渡航経験があった。例えば早くも明治 35（1902）年 8 月、25 歳の井上は、留学先のウィーンから、オーストリア参謀本部将校とロシア人画家の 3 人で、バクー、サマルカンド、タシケントなど中央アジアを歩いた。日本人を監視する目が厳しい日露戦争勃発 2 年前のことである。この旅行は、明治期のアジア探検史上において、大乗仏教の東方伝来ルートを辿った本願寺の大谷光瑞（1876－1947 年）、あるいは単騎シベリア横断を果たした福島安正（1852－1919 年）と比較しても遜色なく、その記録は『明治シルクロード探検紀行文集成』の第 17 巻に収められている。[6]

では井上雅二とはいかなる人物であったのか。本稿では紙面の都合より彼の活動の詳細には踏み込む余地はないが、ここでは井上の人物像や理念を浮き彫りにすることを主眼に置く。とりわけ官職につかない井上が世に出るにあたっては先達の鞭撻を無視することができない。こうした点に触れつつ井上の肖像画を描きだすことで、今後の井上研究の序章としたい。

1. 井上の半生――還暦の日記より

昭和 11（1936）年正月、還暦を迎えた井上は、今後 10 年をいかに生きるべきかを考えた。70 歳になると心身の退嬰期に入り、たとえ体質が強靭であっても第一線では活躍できないと考えたからである。そこで、井上はこれまでの軌跡を振り返った。この手記は、井上自

身が自らの人生をいかに捉えていたのかを示す絶好の資料であるので、本節ではこれをもとに彼の半生を紹介していきたい。[7]

まず井上は、60 才当時の社会的地位を列挙した。すると 6 社名が並んだ。すなわち海外興業会社社長、南亜公司取締役、秘露綿花会社社長、スマトラ興業会社監査役、海南産業会社監査役、そして東洋拓殖会社常務顧問である。また、自らが関与する国際交流・文化・公共団体を列挙するとその数は 34 を数えた。主なものには南洋協会専務理事、東亜同文会理事、人口問題研究会常務理事などが挙げられる。[8] これらの組織名から、井上が産業界に軸足を置きつつ日本の国際的な発展を期したことが窺える。

さらに教育関係における貢献も多大であった。手記によると井上は、海外高等実務学校校長、海外植民学校長、財団法人八紘学院理事、そして攻玉社評議員と 4 校に関係していた。この内、攻玉社を除く 3 校は、日本人の海外移植民を養成する学校であった。つまり井上は産業界に加えて、日本人の海外発展を教育面からも支えたのである。

次に井上は、自らの過去の活動を項目別に整理した。それらは「著作」、「清朝末期に於ける活躍」、「韓国施政の改善と宮中の粛清」、「南洋の開拓」、「邦人の海外移植」、「日支人材の造成」、「南洋協会商業実習生制度」、「其他の教育施設」に分類された。これらの項目から漏れた活動も多くあるが、ここでは井上が残した各項目に従って彼の半生を俯瞰しておきたい。

まず「著作」であるが、井上はおよそ 20 冊を著した。著作の他にも新聞雑誌記事や講演など多数ある。しかし井上は、これらの著作は後世になんら後に残す価値はないと切り捨てた。とはいえ著作は彼の関心の方向性を示す絶好の資料であるので簡単に紹介するならば、『南洋』（冨山房、1915 年）、『往け、南は拓く』（刀江書院、1940 年）、『東亜共栄圏と南方』（大日本青年団本部、1940 年）など南洋関連の執筆が圧倒的に多い。また、『移住と開拓』（日本殖民通信社、1930 年）、『三たび友邦大ブラジルを訪ねて』（1935 年）など日本人の海外移民に益する著作群が挙げられる。

さらにはフィリップ・ジョルダン著『セシル・ローズ私生涯』（実業之日本社、1913 年）やヘンリー・モーリス著『植民論』（新声社、1904 年）、独逸帝国統計局編『独逸ニ於ケル植民地経済ト本国産業』（東京、生産調査会、1912 年）の翻訳、また韓国在勤時にはイギリスのエジプト統治から韓国経営の範を得ようと『埃及に於ける英国――韓国経営資料』（清水書店、1906 年）を著した。このように欧米の先例から日本の海外進出の青写真を描いた点も井上の特色であった。

しかし井上の真骨頂は著作ではなく行動であった。「清朝末期のおける活躍」と「韓国施政の改善と宮中の粛清」は、それぞれ井上の青年時代の活動である。井上は、日清戦争の砲弾が冷めやらぬ明治 28（1895 年）10 月、18 歳で陸軍の通訳として海外初体験となる台湾に赴任、民政庁埔里社出張所詰となり「蕃民撫育係」を拝命し、当時の日本人にとって未知・未開の地であった台湾の奥地に足を踏み入れ、原住民の「宣撫」を担った。この経

験は、大正期に彼が挑戦したマレー半島におけるゴム園開拓に生かされることとなる。

また、明治 30（1897）年には東亜同文会の前身である東亜会幹事として、朝鮮半島・シベリア・樺太等を視察、翌年 10 月に東亜同文会が創設されると幹事に就任した。周知の通り東亜同文会とは、西洋列強の東漸に晒されているアジアが「東亜の保全と輯協」を目的に設立された団体であり、日中両国人の教育事業、中国に関する調査研究及び出版、そして中国に関する知識普及活動など幅広く活動した。特に教育事業には積極的であり、明治 32（1899）年には中国人留学生を受け入れる東京同文書院を、明治 33(1900)年には中国を学ぶ日本人学生を対象とした南京同文書院を設立、さらに明治 34(1901)年には上海東亜同文書院を開校した。大正期には天津や漢口にも同文書院も設立している。井上は、明治 32（1899）10 月から上海支部幹事として中国に赴任すると、上海同文書院の創立に貢献した。この時に義和団事変に遭遇、回想にある「清朝末期における活躍」とはこの時のことを指す。

その後、井上はベルリン大学留学を経て、日露戦争中の明治 37(1904)年に韓国へ赴いた。そして韓国政府財政顧問付財務官、水原政府財政顧問、光州政府財政顧問支部など、日韓併合直前の明治 42（1909）年まで朝鮮半島を舞台に働いた。つまり井上は、明治外交の焦点であった朝鮮と中国に常に存在していたのであった。

そして日韓併合が断行された明治 43（1910）年にはすでに朝鮮半島を去り、世界一周旅行を敢行していた。その帰路にマレー半島を訪れ、ゴム園の経営を決意、明治 44（1911）年に「南亜公司」を創業するのである。同時に井上はシンガポールを拠点とした南洋協会の創設者の一人となった。南洋協会は昭和 20（1945）年の解散時までに、雑誌の発行や商品陳列所の設置、そして商業実習生制度を構築した。また南洋学院の経営や南方特別留学生の受け入れを行った。[9] 井上は特にこれらの教育事業の成立に貢献し、自らの事業に加えて後進を育てたのである。還暦時の回想で井上は、「南洋の開拓事業は、壮年期の大半を占め、前後十二年に亘り、最も気魄を傾注した時代であった」と語っている。[10]

また「邦人の海外移植」とは、海興社長としてブラジルを中心に移民を送り出したことを指す。井上は大正 13（1924）年 3 月に取締役社長に就任し、長期にわたり移植民や海外開拓事業に携わった。[11] そして、「ブラジルへ十三万七千、フヰリツピンへ一萬一千四百、ペルーへ四千五百、其他を合せて約十五萬三千の同胞を一社の手を以て世界の各地に移植し得たことは、我が国海外移住史のレコード」と振り返るのである。[12]

他の「日支人材の育成」、「南洋協会商業実習生制度」、そして「其他の教育施設」の 3 項目は全て教育関連である。日中関係においては、「上海の東亜同文書院創設、漢口、天津における各支那人教育機関の設立、之等に対する三十五年間に亘る経営参加」のことであり、日中をつなぐ 3，000 名に上る書院出身者を育て、南方協会の理事としては、既述の通り南洋で活躍できる日本人人材の育成を期してシンガポールに学生会館を設け、商業実習生制度を設けた。さらに彼は東京に海外殖民学校と海外高等実務学校の校長となり、農業を教える北海道の八紘学園にも参画している。

さらには、昭和 6(1931)年、海興直属の育英事業としてサンパウロ農事実習場を創設、初年度には内地から 33 名、ブラジル移民の子息 19 名、合計 52 名を第一期生として入学させた。その時間割は、週 38 時間のうちに第 1 学年においてはポルトガル語 12 時間、実習作業が 18 時間と、実学重視のカリキュラム編成であった。[13] こうしたことからも、海外に赴く日本人教育に力点を置いていたことが窺えるであろう。

井上の携わった事業は他にも多い。たとえば人口問題への関与である。海興社長辞任直後の昭和 11（1936）年に移民問題研究会を設立すると、翌年 5 月、パリで開催された第 4 回国際人口会議には日本代表として出席した。さらに 13（1938）年 11 月には上海東亜同文書院内に人口問題研究会分室を設置、昭和 15（1940）年 2 月に国立人口問題研究所参与、9 月には目白に井上民族政策研究所を創設した。

以上、井上の回想をもとに示した彼の軌跡を見ると、活躍の分野や舞台が非常に幅広いことが分かるが、彼の行動を要約するならば、自らが日本の海外発展の第一線に立つことに加えて、日本人の海外雄飛を促すための実業教育に傾注したことであろう。現在の言葉を用いるならば、グローバル時代の最先端で活躍すると同時に、実学・実地主義に立つグローバル人材教育に心血を注いだといえるのではないか。

2. 井上の人物像――徒手空拳の海外雄飛の原点

かくも多岐に及ぶ活動を展開した井上とはいかなる人物であり、彼の行動を支える原点は何であるか。井上の生い立ちや人物像はほとんど触れられてこなかったので、本項と次項ではこの点を明確にしておきたい。

井上は、西南戦争勃発の年である明治 10（1877）年 2 月 23 日、兵庫県氷上郡大箕山下神村字菅原に、父足立多兵衛、母イト子の次男として生を受けた。山々に囲まれた狭い土地に生まれ育ちながらも、近くには播磨、丹波、但馬の 3 国にまたがる「三国山」と呼ばれる山が聳える如く、他国を感じる場所であった。

幼少期の井上の人格形成に影響を与えたのは、父多兵衛が語る物語であった。とりわけ井上は豊臣秀吉を生涯尊敬した。もっとも井上にとって、一百姓より身を興して天下人となった出世譚よりも、朝鮮や明を征服せんと遠く海外に軍を進めた点に関心が注がれたようである。秀吉を崇拝するあまり母に願って羽織の背と前掛に「豊太閤」の 3 文字を刺繍してもらい、自ら秀吉を任じ、仲間の少年から 8 人を選び、1 人を家康、他の 7 人は賤ヶ岳の七本槍で有名な 7 人の武将の名前で呼んでいた。[14] 秀吉は、井上にとって海外進出と立身出世を最初に教えた人物であったのである。

井上は、篠山中学（現在の鳳鳴義塾）卒業後の明治 24（1891）年 9 月、海軍予備校の攻玉社に学ぶために上京した。篠山中学には陸軍へ進む者が多数存在したが、海軍は稀であった。井上自身、一時は陸軍大将を夢見たこともあった。それでも海軍を選んだのは、「誰

でもやれることをやって、何の名誉であろう」という気性にあったようである。[15]

しかし明治 25（1892）年 8 月、海軍兵学校が生徒募集をした時点の井上は 15 歳 6 ヶ月であり、受験資格の最低年齢に半年足りなかった。すると彼は誕生日を明治 9（1876）年 6 月 23 日とおよそ半年を偽り、戸籍を改竄して受験資格を得た。[16]しかし試験には不合格となり、その直後、実力試しで受験した海軍機関学校に合格した。不満を抱きつつも江田島に赴き、明治 26(1893)年 12 月に江田島から横須賀に学校が移設されるとそこで学び続けた。

しかし機関将校の養成課程は、指揮官として大艦隊を率い、敵船を撃沈する戦術を教える場ではなかった。井上はひたすらハンマーで鉄を叩き油を指す実習の毎日を送ったのである。また、機関学校卒業生はたとえ出世しても中将止まりであった。この点も井上には不満であった。[17]

明治 27（1894）年、日清戦争が勃発すると、井上は即座に清国出征を上官に訴えた。多くの日本人が出征するのを横目に、日本に取り残されることが我慢ならなかったのである。とはいえ、生徒が戦場に行っても足手まといであるし、上官は生徒の力を借りるに及ばないと井上の申し出を却下、すると井上は、機関学校中退を決断した。

本来、中退は許されることではない。しかし井上は様々な運動を行い、病気を理由についに退校許可を得た。井上に言わせれば、「従軍することが出来なければ、在学の目的を達することが出来ないのであるから、退校しても従軍すべく決心」したのである。[18] しかし職業軍人への道は途絶える。その地位や名誉をなぜかくも簡単に放擲したのか。この点を考えることは井上のその後の歩みを考えるにあたり多くの示唆を与える。

井上の退校を支持した一人に、郷里の先輩であり、後に台湾総督や第二次山本内閣で司法大臣兼農商務大臣となった田健次郎(1855－1930 年)がいた。[19] 後に井上がマレーでゴム園栽培に乗り出す時、田は井上に対して、「自分は丹波の山中に生まれ、薩長の権力ある明治時代に伍して、今日に至ったので、至って割が悪い立場で、まだ大臣にもならぬ。君は宜しく南洋に渡る可し。十年の苦心を経て、内地の政界に踊り出るならば、天下の一角を取ることもできよう」と南洋行きを祝福した。[20] このように、薩長が占める軍隊では出世に限界があり、立身出世と海外雄飛を信条とする井上は海軍に留まる限界を感じたのかもしれない。

しかしより井上の心情を窺うと他の理由が浮かび上がる。海外雄飛の夢を最初に井上に抱かせ、海軍を選ばせた遠因が秀吉であったならば、潔く海軍を辞めた理由は、秀吉に加えて少年期の井上がその名前に触れた人物の影響が考えられる。それは平安時代末期の武将であり、保元物語の主人公である源為朝（1139－1170 年）であった。

井上は、「鎮西八郎」の名で知られるこの荒武者の英雄譚を柏原高等小学校時代の寄宿舎長柳瀬筆三から聞いていた。特に井上は、為朝が藤原信頼から検非違使を与えられようとした際の返答をことさら敬愛していた。為朝は、「われは鎮西八郎にて足れり」と官職を辞し、自らの名をもって自らを任じたのであった。

井上は長じても、あらゆる講演や著書の中で秀吉と鎮西八郎の名前を繰り返し言及している。海軍軍人としての立身を潔く諦めた理由は、為朝の心意気に少年井上が魅了されたことを踏まえると初めて納得がいく。例えば井上は、先述した通り朝鮮半島で官職についたが、それを放棄して南洋開拓に乗り出した。官職に固執しないからこそ、多くの民間組織で日本の海外発展を推進する井上が生まれたのである。

しかし世間の評価は井上の心情を必ずしも正確には汲み取らない。例えば本庄繁（1876年—1945 年）は笹山中学の同窓であった。本庄は関東軍司令官在任時、満州事変が勃発、一躍英雄となった。このとき井上と本庄を比較する新聞記事が現れた。それは、「本庄大将は天下を取つて居るが、井上氏は僅かに海興社長に過ぎない。子供の時に天下を取ると口癖のやうに言つてゐた井上氏が天下を取らず、自分は軍人になると平凡なことを言つてゐた本庄将軍が天下を取った。井上氏は定めて苦笑しているであらう」とあった。[21]

しかし井上の価値を評価する人物もいた。朝鮮総督南次郎(1874－1955)は「満洲を建設せずとも、軍司令官たらずとも、世界を家とし、世界の到るところに仕事を印し、今日に至つて倦まざる君は天下を取つて居る」と井上に語った。井上はこの言葉を誇りとし、後年幾度も回想している。軍人や政治家として栄達の道を歩み、名声を博することには関心がなく、「天下を取るといふ事は、形の上ではなくして心の上にある」と還暦の時に記したことは、「われは鎮西八郎にて足れり」との言葉を胸に徒手空拳で活躍した井上を考えるうえで興味深い。[22]

話を海軍機関学校退校時に戻そう。いったん郷里に帰った井上は、東京専門学校（現在の早稲田大学）に学ぶことを欲して再び上京を試みる。その道中、京都にて、ほぼ偶然といっていいが、運命的な出会いを遂げる。すなわち荒尾精（1859－96 年）と出会うのである。井上はこの邂逅によってアジアへの第一歩を踏み出すのである。

３．荒尾精との出会い——先達との邂逅

荒尾精といえば、日本と中国の連携を図る一群の「アジア主義者」を代表する人物として知られている。尾張藩士の家庭に生まれ、明治 11（1878）年に陸軍教導団、明治 13（1880）年には陸軍士官学校に入学、明治 15（1882）年には陸軍歩兵少尉に任じられた。しかしこのとき、荒尾は「此際断然本職を辞し、以て清国に航せんと欲す」と主張した。[23]西力東漸の波の中で清国事情を探求したいとの気持ちが抑えられなかったからである。

軍人としての栄達を辞してまでも清国を実見したいと願った荒尾は、日清戦争の勃発を機に清国をこの目で見たいと欲し、海軍機関学校を去った井上と通じる。荒尾は、なぜ清国に赴きたいのかと頻繁に尋ねられた。欧米を範とする時代を考えれば、清国を知るために陸軍を辞めたいと訴える者は稀有であったからである。荒尾は、「海内の士皆欧米に心酔して清国を顧みず、是れ愚が清国に遊んと欲する所以」と答えた。そして、清国で「之を

治めて以て東亜を興さんと欲する」と、西力東漸の濁流で衰退の一途を辿る清国を助け、日本と提携することで西洋と対抗し、もってアジアを保全するとの考えを吐露したのである。[24]しかし荒尾は井上とは異なり辞意を撤回して陸軍に残った。

明治 18（1885）年、参謀本部支那部附となった荒尾は、翌年春、28 歳のときに中国赴任を命じられ、陸軍軍人として念願の大陸の地を踏んだ。上海では岸田吟香（1833－1905 年）と親交を温め、彼の協力により、書籍・薬品・雑貨を販売する商店「楽善堂」を漢口に開業した。荒尾の狙いは、商売を通じて清国事情の調査研究の財源を蓄えることであった。また、商店経営は清国官憲の警戒を招かないためにも好都合であった。こうして清国各地の事情調査を行い、陸軍に情報を提供したのである。

かくして 3 年を漢口で過ごして明治 22(1889)年 4 月に帰国した荒尾は、ひとつの構想を携えていた。それは、「日清貿易研究所」の創設案であった。西洋列強のアジア進出が逞しい中、日本が独立自尊を貫くには経済力を蓄える必要があり、そのためには平時において清国との間で貿易を通じた提携を積み重ねるべきと考えたからである。貿易振興には人材養成が急務であった。そこで荒尾は、日清貿易研究所の上海設立を構想したのであった。

荒尾は帰国直後からこの構想を要人に説き、さらには日本各地で世論を喚起すべく講演を繰り返した。例えば明治 22（1889）年 12 月に博多で行った講演では、日本が軍事増強を必要とするとはいえどもこれを支える経済力が乏しいことを指摘、西洋列強と対等の地位を獲得するには何よりも商工業の発達を図り、「外国より金銭を引入る」ことが急務と説いた。この目的のために荒尾は「軍人社会を脱し、商工業者の御中間入りをして、商工業の周旋役」に身を転じたと述べたのである。[25]

では日本はいずれの国と貿易関係を拡大させるべきか。荒尾曰く、欧米は習慣風俗も異なり、さらに日本の国力ははるかに劣勢であるので、貿易を試みても利益は期待できないが、中国と日本は「風土人情」などあらゆる面で類似しており、また地理的にも近接しているので、日清貿易は発展できると考えた。しかしこの分野に精通する日本人は非常に少ない。そこで優秀な若者を中国で学ばせる機関として日清貿易研究所を構想したのであった。[26]

彼の構想は実現した。明治 23（1890）年 9 月、荒尾は職員生徒約 200 名を引きつれて横浜を出航、20 日に上海で開所式を開催するに至るのである。また明治 26（1893）年 7 月、上海に日清商品陳列所を創設し、研究所の卒業生を毎日 15－20 名程度実習させることで現場で貿易や商売を学ばせたのであった。[27]

しかし荒尾は日清戦争勃発に伴って帰国し、京都に滞在した。夢半ばでの帰国であった。このとき、荒尾は海軍機関学校退校直後の井上と出会ったのである。二人は瞬く間に意気投合した。井上が清国を見たいとの理由で海軍機関学校を辞めたことを伝えたからである。荒尾は、自身も陸軍士官学校の在籍中に清国問題に目を覚まし、退校して清国に渡ろうとしたが許されず、その後中国訪問の機会が訪れるまで 7 年を要したと答えた。そして井上

に、「そりゃ、永い辛棒じゃったわい」と語り、「君は早く気がついた。それだけ慧眼ぢやつたわけぢや。まったく君のような人物は海軍士官には惜しい。よく決心されたな。よかつた。よかつた。」と褒め称えた。そして、「国士としての素質涵養が第一で、東亜の研究其他は第二段」であること、荒尾も興亜学院を設けて「天下の秀才とともに研鑽するの意向」を語ったのである。[28]

井上は海軍を辞し、まさに徒手空拳で立身を図る必要があったが、彼が世に出ることができたのはこうした先達に恵まれていたからであることは論を待たない。日清戦争中に井上が台湾赴任の機会を得たこと、また東亜同文会へ参画できたことなどはすべて荒尾の好意であった。

荒尾は明治 29（1896）年、東方通商協会を設立せんと台湾を巡視中に急死、38 歳であった。しかし荒尾が抱いた日清両国の連帯構想は、彼の同志や門下生が創設した東亜同文会に引き継がれるのである。井上のその後の事業を見ると、荒尾と多くの類似点が見て取れる。すなわち、西力東漸の中、日本が独立を維持するには海外発展を試みるべきであり、それには軍事力に頼るのではなく国力の充実であり、そのためには貿易を中心とする商業の発達がなければならないと考えたこと、そして海外へと商業的進出を図るための人材育成、この 2 点である。特に後者においては、人材養成とその方法が現地主義に徹したことなど、荒尾の方針は後に井上がシンガポールで行う人材養成機関に引き継がれるのである。井上は、まさにこの 2 点を荒尾から学び、自らの目標に定めた。その実験が南洋にて行われるのである。

4．南洋と井上

ここでは、井上について語る際に欠かせない南洋との関わりを見ていきたい。[29] 明治 42（1909）年、井上は 7 年を過ごした朝鮮半島を辞す。そして、産業調査を名目に、欧州および北アフリカへの旅に出た。明治 43（1910）年 5 月に横浜港を出港し、翌年 4 月に帰国するまでの間、井上はアメリカを経由し、ヨーロッパではイギリス、スコットランド、オランダ、ベルギー、フランス等主要国の殆どを訪ねた。その後地中海を渡り、モロッコのタンジール、アルジェリア、チュニス、マルタを巡り、シチリア島経由で再びヨーロッパに戻る。イタリア、オーストリア、モンテネグロ、ハンガリーを歩き、さらにはトルコとエジプトを周遊の後、インド、英領ビルマ、マレー、バタビア、シンガポールに赴いた。そしてこの世界一周旅行の終盤、再びマレーを訪ねてジョホール河を遡り、邦人経営のゴム植民地を視察した。ここでゴム栽培事業に乗り出すことを決意したのである。

帰国後、井上は時の首相桂太郎（1848－1913 年）ら政府首脳に賛同を求めた。その後は朝鮮に渡り、朝鮮総督府に勤務する明石元二郎（1864－1919 年）と会った。明石から「これから何をするつもりだ」と尋ねられた井上は、「南洋の百姓になる」と答え、大いなる賛

同を得た。[30]

また井上はこのころ、海外貿易に従事していた実業家森村市左衛門（1839-1919 年）と知己を得た。井上が南亜公司を創設し、南洋での初事業に乗り出すことが可能であったのは、森村の支援があったからである。

森村は森村組を創設、日本陶器合名会社（現在のノリタケ）からなる森村財閥の創始者である。彼は事業家の範疇を超え、日本の海外発展を構想していた。具体的には、「日本の貧しき農民を多数此處に移住させて、一の新殖民地を開拓したい」、「国民の立つべき地盤を（領土にあらず）なるべく廣く大きくとって置く」べきと考えていた。海外領土を求めるのではなく、国民が「良好なる舞台を発見して、資本的なり移住的なり、どしどし海外に発展する」ことが日本のとるべき進路と提唱していたのである。[31] その背景には、近代日本が悩んだ人口増加に伴う食糧問題が横たわっていた。しかし森村はこの難問を「国家の優劣存亡を試験せんとして居る」と捉え、日本は「世界の舞臺へ押し出すといふ積極的方針」によって克服すべきと考えていたのである。[32]

しかし日本は、明治初期より北米に移民を送っていたが、移民に関する問題が続出、森村はこれによって日本人の海外発展の気勢が削がれたと見た。その土地で骨をうずめる覚悟を持った日本人が海外に移住しなければ、日本の生存圏が確保されない。このように考える森村の前に現れたのが、南洋に骨を埋める覚悟であった井上であった。井上は森村に「どこか適当な良い土地を卜して、日本人の新殖民地を作りたい」とその決意を示し、森村は大いなる共感とともに南亜公司設立に貢献したのである。[33]

井上は明治 44（1911）年 12 月 25 日、ふたたびマレー半島に戻り、ジョホールにて森林の伐採からはじめた。中国人やマレー人を雇って開拓したが、マラニアに侵され、さらには猛獣に襲われるなど困難の連続であった。こうして事業を拡大させ、増資、小ゴム園の合併買収、耕地の拡張を繰り返し、大正 10 年には大戦後の不況にもかかわらず開墾面積 1 万エーカー、利益年 40 万円、生産年 120 万ポンド、使用人は 1,600 人を超えるに至ったのである。[34]

それにしても井上は何故南洋に進出せんとしたのか。この点について井上は、日本人の祖先は南方より来たのであり、日本人が南洋に伸びるのは当然との観念があった。また、先に触れた世界一周旅行の中で、「興亜と南方経綸の重要性を感得し」たと振り返っている。つまり「我が国の資源地盤」としても、南アジアの蘭領インド、フィリピン、英領マレー フランス領インドシナは「我が製品を需要する最も重要なる市場」となるべきであり、さらには南洋と日本との結びつきを経済的・文化的に強化すれば、アジアの中心である中国大陸とその右翼である朝鮮・満州、そして左翼に南洋を置き、アジア全体と日本が相互に連携できると構想したのである。[35]また、ゴムは欧州において需要が伸びつつあるのでその将来性を有望と判断したことも、ゴム生産が盛んなマレー半島に足を踏み入れた理由であった。[36]

こうした中、井上も大きく携わって設立されたのが南洋協会であった。南洋協会の設立やその理念、そしてそれに携わった人物に関しては先行研究があるので詳細は論じる必要はないが、それでも井上が南洋事業に必要な人材育成を積極的に図ったことは触れておきたい。[37]

井上は南洋事業に最も必要なのは人材養成と考え、南洋協会発足時からシンガポールに学生会館を設置することを主張した。当初は予算上の理由で保留となったが、農商務省の委託でシンガポールに商品陳列館が設置される際に学生会館が置かれた。ここは内地から募った中等学校程度の卒業生 20 名が 1 年の修業年限で研修を受ける場となった。その内容は大半がオランダ語、マレー語、英語に費やされた。[38]　加えて商品陳列館では付属事業として商業実習生制度を設けた。これは会社や商店の委託に応じて採用、第 1 回実習生は内地で募った 10 名を 1 年以上、マレー語、オランダ語、中国語から一科目を学ばせ、英語や経済事情は必修、加えて商品陳列館で商取引や通関業務、貿易調査、会計などに従事させるなど徹底的な現場主義を貫いた。[39]

南洋協会が手がける様々な人材養成に関して、井上は東亜同文書院とよく比較している。後者は、「対支問題に冠する中堅人物の養成」が主要目的であったが、南洋協会においては、「中等程度の卒業生を南洋各地の我が商店に配属せしめて、実地の経験を積ましめ、数年の練習を経て、各独立営業に展開せしめたい」というのが目的であった。つまり、これはと思う青年を採用して各地の日本人商店に配属して、朝早くから夜遅くまで店員として実地の訓練を施すのである。[40]　この意味で井上の教育は決してエリート教育ではない。

なぜ実地訓練を重視したのか。その一因は、井上のアドバイザーといえる森村の存在が挙げられる。森村は、「学者は空論に陥り易く、商人は卑屈に陥り易きも一面於て商人は、実践躬行上より練磨し来て、其の云ふ所極めて適切なるものなきに非ず。例へば事業は實の如く、学者の云ふところは花の如し。花を見るは易きも實を結ぶは難い。苟も事業に当る者は、花を捨て實を結ぶに専らでなければならぬ。他人より唾を吐きかけられ、足蹴にされ侮辱の限りを盡さるゝとも、自己の信念により必ずや利潤をあげて、成功を期する底の覚悟がなければならない。」という手紙を井上に送っている。[41]

加えて井上が実地訓練を重視した理由は、「日本人の通弊としてすぐ会社員や役員になりたがる」と考えていたことにある。しかし商売は経験が必要である。特に南洋に関しては、現地での実習が不可欠であった。なぜなら南洋には多くの華僑が存在し、商業を独占していたためであった。日本人が商品の販売網を拡大するにしても、華僑の協力が不可能である。こうしたことから、井上は、日本人の若者が東南アジアで華僑をはじめとするネットワークの構築を期したのである。

おわりに――セシル・ローズと「大日本主義」

南亜公司という名称は、セシル・ローズ(Cecil John Rhodes, 1853-1902)の南アフリカ会社の名前から取られた。なぜセシル・ローズなのか。ローズは坑夫として南アフリカでつるはしを振っていたとき、ダイアを掘り当てたことでデビアス鉱業を創業、1889 年に南アフリカ会社を設立した。「神は世界地図がより多くイギリス領となることを望んでおり、夜空に浮かぶ星さえも併合したい」と有名な言葉を残しているローズは、アフリカのナポレオンと称された。そのローズを井上はとりわけ尊敬した。明治 34（1901）年、欧州留学中の井上はローズに会おうとしたが願いが叶わず、ローズ死去の後、彼に近い人物を訪ね歩き、ローズに関する書籍を買い集めていた。そして、ローズの秘書フィリップ・ジョルダンの手による伝記に出会った井上は、これを邦訳するに至った。

井上が慕ったのは、けっして強靭とはいえない身体の持ち主であったローズが、未知の土地であるアフリカ大陸に身を投じ、「アングロサキソン族の必ず宇内を統一すべきを信じ」て活躍したからであった。井上はローズを「憧憬する近世の快男子」と絶賛し、現在の太閤秀吉に喩えた。「古の太閤」が今の時代に生まれていたとすれば、現代の時代に適応して「経済的帝国主義の権化」となり、「威力遠く四海を壓する」英雄となっており、またローズが太閤の時代に生まれておれば同様の活躍をしたであろうとして、「古の太閤は今のローヅたる可く、今のローヅは古の太閤を紹く能はざらんや」と、太閤と同じ評価を与えている。そして、「幼にして太閤を體し長じてローヅを想ふ、余に於て自ら一道の信念あり、一貫の趣味あり」と自らを語っている。[42]

井上の人生の軌跡に流れていたのは、世界に雄飛する日本を実現するため、日本人が世界を家とすることであった。その理想を井上は「大日本主義」という言葉で表現した。井上は、同時代の世界は「弱者は依然として強者の肉たるが人類界の実相」であり、「適者生存」は「古今を貫く審理」と認識していた。[43]　この熾烈な競争の中で日本が「優勝国民」として繁栄を欲するならば、「外に向かっては盛んに植民地を経営し、移植民を送り、所謂植民帝国となりて、本国以外に市場を開拓し、若くは内地工業原料の地盤を獲得」しなければならないと信じた。[44]　そして日本にとってその条件を満たす土地として目に留まったのが南洋と南米であった。

「大日本主義」との言葉は、一見すると狂信的な膨張主義者を髣髴させる。また、井上が生きた時代における国家の行動原理が弱肉強食であったとはいえ、秀吉やローズを尊敬する姿は現在から見れば隔世の感がある。しかし井上は、軍事力を背景とした勢力圏の拡大を目指したのではない。彼が模索したのは、西洋列強の圧倒的な国力がアジアを席巻する中で日本が存続する道であった。それは日本の商業的発展であり、資源の獲得であり、人口問題解決のための移民であった。彼は同時代を冷徹に見つめ、実体経済の上に立ち、将来を構想した。そして「適者生存」の真理の上に生きるためには、日本人の海外雄飛こ

そが必要であること、したがって日本人の現地における経験がなによりも重要と考えたのである。こうした井上の理念や行動は、官職に甘んじない徒手空拳の民間人であったがゆえに備わった自由な構想力の産物であり、また彼を支えた荒尾や森村らの存在がもたらしたことを想起するならば、彼の足跡はグローバル人材を必要とする現在日本にとっても何らかの示唆を与えるのではないだろうか。

注

1. 井上雅二「帝國の将来南と洋の富源」（南洋協会編『南洋協会講演集』1922 年）87 ページ。
2. 永見七郎『興亜一路――井上雅二』（伝記叢書 251、青空社、1997 年）999 ページ。原著は 1942 年に刀江書院から出版されている。
3. 井上雅二とその妻秀子の思想に踏み込む研究として、Michael A. Schneider, "'Were Women Pan-Asianists the Worst?: Internationalism and Pan-Asianism in the Careers of Inoue Hideko and Inoue Masaji," in Sven Saaler and Victor Koschmann, eds., *Pan-Asianism in Modern Japanese History: Colonialism, Regionalism, and Borders* (Routledge, 2007), pp. 115-129.
4. 横井香織「井上雅二と南洋協会の南進要員育成事業（『社会システム研究』第 16 号、2008 年 3 月、飯窪秀樹「井上雅二の社長就任までの海外興業会社――『山荘独語』からの考察」（『横浜市立大学論叢――人文科学系列』第 60 巻第 3 号、2009 年）。
5. 飯窪秀樹「井上雅二の社長就任までの海外興業会社」186 ページ。
6. 中央アジア探検の記録は『中央亜細亜旅行記』（民友社、1903 年）、後に「亜細亜中原の風雲を望んで」（照文閣、1942 年）に再録。現在では『明治シルクロード探検紀行文集成　題 17 巻』（ゆまに書房、1988 年）に収録されている。
7. 井上雅二『興亜一路』（刀江書院、1939 年）245－254 ページ。
8. 南洋協会専務理事、東亜同文会理事、海外移住組合連合会理事、日土協会常務理事、日本蘭領印度協会常務理事、日伯中央協会常務理事、海外協会中央会副会長、人口問題研究会常務理事、日墨協会理事、辛未同志会理事、南洋栽培協会監事、日亜協会理事、南米企業組合理事、東京府海外移住組合理事、日本羅甸アメリカ協会評議員、東洋協会評議員、日濠協会評議員、日希協会評議員、同仁会評議員、東亜経済調査局評議員、国際殖民協会委員、日本国際協会評議員、同経済委員会委員、暹羅協会評議員、日本貿易協会評議員、海軍協会評議員、比律賓協会評議員、アフガニスタン倶楽部委員、サンパウロ病院建設後援会常務委員、満洲移住協会評議員、梧堂会会主、海外殖民協会顧問、久敬会会長、南星会会長
9. 研究史を踏まえた論稿として、河西晃佑「南洋協会と大正期『南進』の展開」（『紀尾井史学』第 18 号、1998 年 12 月、39－53 ページ。
10. 井上雅二『興亜一路』251 ページ。
11. 飯窪秀樹「井上雅二の社長就任までの海外興業会社――『山荘独語』からの考察」（『横浜市立大学論叢　人文科学系列』第 60 巻第 3 号、2009 年）。
12. 井上雅二『興亜一路』251 ページ。
13. 永見七郎『興亜一路――井上雅二』775－777 ページ。
14. 同上、12 ページ。
15. 同上、33 ページ。
16. 同上、40 ページ。

17. 同上、58－59 ページ。
18. 井上雅二『支那論』（東亜同文会、1930 年）9 ページ。
19. 永見七郎『興亜一路――井上雅二』66 ページ。
20. 井上雅二『往け南は招く』（刀江書院、1940 年）11 ページ。
21. 永見七郎『興亜一路――井上雅二』256 ページ。
22. 井上雅二『興亜一路』256 ページ。
23. 井上雅二『巨人　荒尾精』（左久良書房、1910 年）11－12 ページ。
24. 同上。
25. 同上、38－39 ページ。
26. 同上。
27. 同上、38－80 ページ。
28. 同上、70－73 ページ。
29. 矢野暢『「南進」論の系譜』（中央公論社、1975 年）、同『日本の南洋史観』（中央公論社、1979 年）など。
30. 井上雅二『東亜共栄圏と南方』（大日本青年団本部、1940 年）10－11 ページ。
31. 森村市左衛門『自助』（栄文館書店、1915 年）、348－358 ページ
32. 同上。
33. 同上、356 ページ。
34. 永見七郎『興亜一路――井上雅二』668 ページ。
35. 井上雅二『往け南は招く』（刀江書院、1940 年）5 ページ。
36. 「南亜公司専務取締役　井上雅二氏談　護謨の生産」（『満州日日新聞』、1918 年 7 月 14 日）。
37. 河西晃祐「南洋協会と大正期『南進』の展開」（『紀尾井史学』第 18 号、1998 年 12 月）42 ページ。
38. 横井香織「井上雅二と南洋協会の南進要員育成事業」78 ページ。
39. 同上、79 ページ。
40. 井上雅二『東亜共栄圏と南方』80 ページ。
41. 永見七郎『興亜一路――井上雅二』501－502 ページ。
42. フィリップ・ジョルダン著『セシル・ローズ私生涯』（井上雅二訳、実業之日本社、1913 年）8－9 ページ。
43. 井上雅二『南洋』（冨山房、1916 年）1－2 ページ。
44. 同上、9 ページ。

Received on January 6, 2014.